

小泉信三著「海軍主計大尉小泉信吉」文春文庫、文藝春秋 1975年1月25日刊を読む

1. 信吉の勉強室は、二階の私の書斎の真下にあった。私の書斎には、手近に置きたい辞書類が書棚に並べてある。歴史を好む信吉の最初に目をつけたのは、大日本人名辞書三巻、岩波の「西洋人名辞典」であった。次いで岩波の経済学辞典を利用し始めたらしい。その頃から職務上私の書斎に落ち着く時は段々乏しくなっていく、幾日も続けて机の前に坐らないことがある。時々気が付いて見ると、私の辞書棚の処々に空隙が出来ている。偶然階下の信吉の勉強室に入って見ると、私の室から持ち出されたものが、彼れの組立て書架に納まっている。前記人名辞書の外、経済学辞典はやがて全部移転した。高垣寅次郎編商業経済辞典も持ち去られた。改造社版の、恐ろしい細字で組んだ古い社会科学大辞典がある。岩波の哲学辞典がある。セリグマンの社会科学百科全書(Encyclopaedia of Social Sciences)はこれは全部ではないが、その幾冊かを彼れの書架に見出したことがある。独逸語の国家諸学全書は読めないで、彼れが興味を持っていた「貴族論」に装飾的引用をする為めらしい一冊を持って行った。「オヤ、こんな本を持ち出したのか」と言ったこともある。「いけませんでしたが、一寸読みたいので拝借して来ました」と彼れはまじめに弁解した。彼れの勉強室は前記の通り、私の書斎の真下に当り、その隣りが私の小書庫になっている。彼れは私の書斎から辞書類を持ち出すと共に、書庫からも自分の欲する書籍や雑誌類を取り出しては部屋に持ち込んだ。私の同学の友人は、同時に多くは信吉の学者として声名を聞き知る人々である。その人々から著書の贈呈を受ける。始めは「お父様、こんな方もお友達？」などと言っていたが、何時か当然の権利の如く、贈呈本の小包みは、彼れが開封するような形勢になった。又これは同学の仲間とは言えないが、伊藤正徳氏から贈呈される海軍関係の著書も、近頃は彼れが私より先きに読んだものが多い。それで、慶應義塾を卒業する頃には、彼れの小書斎には自分の趣味に従った小さなコレクションが出来ていた。見ると、経済史、経済学、社会史、社会学に関するものがその要部を占め、殊に封建制度、諸侯、武士、城廓、刀剣というような題目のものが多きを占めている。これが海軍々人になるまでの信吉の学問的興味の対象をなしたもので、彼れが他日、奉職する三菱銀行で多少の余裕を持つようになったら、纏めて書き上げたいという夢を抱いていた主題も、凡そこの辺にあつたらしいのである。
2. このような次第で、時々私が書斎に落ち着いて物を調べようとすると、参考書類が見えなくなっていることがあった。私はよく床を物で叩いて、「オイ、×××の辞書そっちへ行ってないか」と声をかける。「あります。御免なさい」とやはり大声で下から答える。やがて段階を昇る足音が聞こえ、続いてノックが聞こえ、言われた本を抱えた信吉が、舌を出し頭を搔くという科しぐさはしないが、頬の肉でそれに相当する表情をして、扉口に現れる。こういうことがよくあった。
3. 彼れはまた時々下手なピアノを弾いた。妹どもに教えられてバイエル教則本七十五番というのを重苦しいタッチで繰り返し繰り返し弾く。可笑しいこともあるが、うるさくもなってくる。「オイ、ピアノやめろ」と上から怒鳴ったことも幾度かある。反対に、私の方で苦情をいわれたこともある。彼れの勉強室と書庫との間が幅一間位の板羽目になっている。私は読書に倦むと、よくラケットと

球を取り出して、庭に降りて、この狭い板羽目に球を打ち付けて、テニスの練習をする。部屋の中で読書している信吉には、壁を打つ球の音は堪らないに違いない。彼れは窓から顔を出して、言いくそうに、「お父さま、勉強だからやめてよ」ということもあり、「駄目だよ、勉強してるんじゃないか」と突慳貪つっけんどんにいうこともあった。こっちもその時々気分によって「失敬々々、気が付かなかった」とあやまったり、「オイ、もう勉強も好い加減にしろよ」と負け惜しみをいったりした。

4．庭にただ一本の木蓮の花の咲いていた頃のこともあり、同じく一本の小さな柿の木に、数え切れない程の実がなって、細い枝が千切れそうに垂れ下がっていた頃のこともあり、庭の土の乾き切った盛夏の真昼のこともあった。窓の外から窺うかがえば、薄暗く見える部屋の隅の回転椅子に腰かけて机よに倚っていた信吉の読書の姿は、今も目に残っている。

#### [コメント]

慶應義塾大学の塾長であった小泉信三先生とご子息で 25 歳で戦死した小泉信吉大尉との学生時代の思い出。息子を偲び、忙しい中毎夜、1 年間かけて書き上げた感動の手記。

- 2010 年 5 月 9 日 林明夫記 -